

箱崎 37

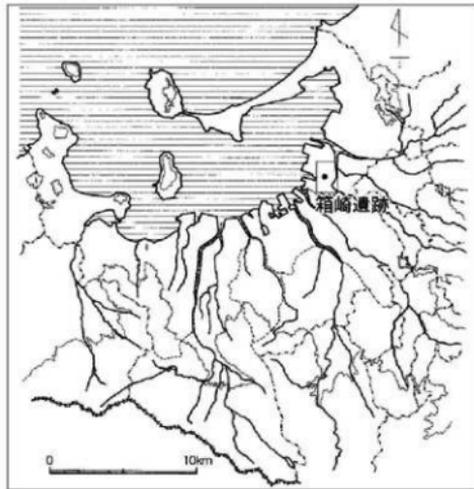
—箱崎遺跡第56次調査報告—

2009

福岡市教育委員会

箱崎 37

—箱崎遺跡第56次調査報告—



遺跡略号 HKZ-56
遺跡調査番号 0665

2009

福岡市教育委員会



1. 箱崎遺跡第56次調査 調査区北半全景（南から）



2. 箱崎遺跡第56次調査 調査区南半全景（南から）

1. SX-31 (西から)



2. SK-19遺物出土状況
(北から)



3. SK-37遺物出土状況
(北東から)



序

福岡市には多くの文化財が分布しており、本市では文化財の保護、活用に努めております。しかし本市では各種の開発事業も多く、やむを得ず失われる文化財については記録保存のための発掘調査を行っています。

本書は共同住宅建設に先立って調査された箱崎遺跡第56次調査の報告であります。発掘調査の結果、中世から近世を中心とした遺構・遺物が見つかりました。箱崎は宮崎宮が10世紀に創建されて以来、宮崎宮の隆盛とともに発展してきた町ですが、近年の調査により、弥生時代の甕棺や古墳などが発見され、集落としての開始時期は宮崎宮創建より遅ることがわかってきました。現在のところ箱崎遺跡の発掘調査は区画整理の行われた東側に集中しており、箱崎遺跡の西側の状況については性格不明の部分が多くあります。本調査は箱崎遺跡の砂丘西側緩斜面にあたり、その成果は箱崎遺跡の研究において重要な意義をもっております。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野での一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から資料整理にいたるまでご理解とご協力をいただいた、東宝住宅株式会社をはじめとする関係各位に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例 言

1. 本書は共同住宅建設に先立って、福岡市教育委員会が、2007年2月1日～4月27日にかけて行った箱崎遺跡第56次調査の発掘調査報告書である。
2. 検出した遺構については、調査時に遺構を示す記号Sを付して検出順にS-1,S-2のように通し番号をつけた。本文ではこの番号に遺構の性格を示すアルファベットをSのあとに付した。また本文では遺構番号をSK-01のように数字を二桁で記述する。
3. 本書で使用する方位は真北である。
4. 本書で使用した遺構・遺物実測図は赤坂亨（福岡市教育委員会埋蔵文化財第一課 [当時]）・上方高弘（埋蔵文化財課調査員）・中村理、および櫻田恵里奈・安武憲史（福岡大学生）が作成した。製図は赤坂が行った。
5. 本書で使用した写真は、赤坂が撮影した。
6. 本書の執筆・編集は赤坂が行った。また陶磁器の整理には上方の協力を得た。
7. 陶磁器・土師器の分類および時期比定には以下の文献を参照した。
山本信夫2000『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』（太宰府市教育委員会）
九州近世陶磁学会編2000『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』（九州近世陶磁学会）
横田賢次郎・森田勉1978『大宰府出土の輸入中国陶磁器について』『九州歴史資料館研究論集』4（九州歴史資料館）
8. 報告書抄録は裏表紙に記載した。
9. 本報告の記録類、出土遺物は収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので活用されたい。

遺跡調査番号	0665		遺跡略号	HKZ-56	
地 番	福岡市東区箱崎1丁目2505,2506,2939		分布地回番号	箱崎 34	
開 発 面 積	867.94㎡	調査対象面積	505.08㎡	調査面積	424㎡

本文目次

I. はじめに	
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	4
III. 調査の記録	
1. 概要	4
2. 遺構と遺物	4
IV. 小結	25

挿図目次

第1図	箱崎遺跡調査地点位置図 (1/9,000)	2
第2図	箱崎遺跡第56次調査位置図 (1/600)	3
第3図	箱崎遺跡第56次調査周辺図 (1/250)	3
第4図	箱崎遺跡第56次調査遺構配置図 (1/100)	5
第5図	SE-02・06 (1/40)、SE-02出土遺物 (1/3)	6
第6図	SE-01・03・16 (1/40)	7
第7図	SE-03・16出土遺物 (1/3)	8
第8図	SE-04・05・13・14・15 (1/40)	9
第9図	SE-04・05・14出土遺物 (1/3)	10
第10図	SE-07・10・11 (1/40)、SE-10・11・16出土遺物 (1/3)	11
第11図	SE-07出土遺物 (1/3)	12
第12図	SE-09・33・38・39 (1/40)	13
第13図	SE-09・20・38・39、SK-35出土遺物 (1/3)	14
第14図	SE-13・15出土遺物 (1/3)	15
第15図	SE-32・34・42 (1/40)	16
第16図	SE-32・33・34出土遺物 (1/3・1/4)	17
第17図	SK-08・17・18・19・23・35・36・37 (1/40)	18
第18図	SK-08・17・18・19・23出土遺物 (1/3)	19
第19図	SK-35出土遺物その1 (1/3)	20
第20図	SK-35出土遺物その2 (1/3・1/4)	21
第21図	SK-35・36・37出土遺物 (1/3)	22
第22図	SD-28・29・30・40、SX-12・31 (1/40・1/60)	24
第23図	SD-29・40、SX-31出土遺物 (1/3)	25
第24図	箱崎遺跡第56次調査ピット配置図 (1/100)	26
第25図	ピット出土遺物 (1/3)	27

表 目 次

第1表 出土遺物観察表 28

巻頭図版目次

- 巻頭図版 1.箱崎遺跡第56次調査 調査区北半全景 (南から)
2.箱崎遺跡第56次調査 調査区南半全景 (南から)
- 巻頭図版 1.SX-31 (西から)
2.SK-19遺物出土状況 (北から)
3.SK-37遺物出土状況 (北東から)

図版目次

- | | | | |
|------|--|-------|---|
| PL 1 | 1.SE-02・06 (西から)
2.SE-06完掘状況 (西から)
3.SE-01・03 (南から) | PL 8 | 1.SK-17 (西から)
2.SK-19半截状況 (北から)
3.SK-19完掘状況 (北から) |
| PL 2 | 1.SE-16完掘状況 (東から)
2.SE-04・05 (北東から)
3.SE-05完掘状況 (南から) | PL 9 | 1.SK-35・36完掘状況 (南から)
2.SK-35・36完掘状況 (北から)
3.SK-37完掘状況 (北東から) |
| PL 3 | 1.SE-14完掘状況 (西から)
2.SE-13 (南から)
3.SE-15完掘状況 (南から) | PL 10 | 1.SX-12完掘状況 (東から)
2.SX-31完掘状況 (東から)
3.箱崎遺跡第57次調査を望む
(北東方向) |
| PL 4 | 1.SE-10 (東から)
2.SE-11完掘状況 (北西から)
3.SE-09 (南から) | | |
| PL 5 | 1.SE-09 (北から)
2.SE-33 (西から)
3.SE-33井筒 (南から) | | |
| PL 6 | 1.SE-38・39完掘状況 (東から)
2.SE-32 (北から)
3.SE-32井筒完掘状況 (北から) | | |
| PL 7 | 1.SE-42 (北から)
2.SE-34完掘状況 (西から)
3.SK-08 (東から) | | |

I. はじめに

1. 調査にいたる経過

平成18年11月2日付けで東宝住宅株式会社より福岡市教育委員会埋蔵文化財第一課宛に福岡市東区箱崎1丁目2505、2506、2939番の物件に関して、共同住宅建設に関わる埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号18-2-692）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡（分布地図番号34-箱崎 2639・遺跡略号HKZ）に含まれている地点であり、この申請を受けて埋蔵文化財課では申請者と協議の上、平成18年11月24日に申請地内の確認調査を行い、現地表面下130～150cm前後で砂丘層と、井戸・土坑・溝と思われる遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。その結果、建物の構造上遺構の破壊が避けられないため、平成18・19年度に発掘調査、平成20年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。なお調査対象としたのは開発面積867.94㎡のうち、共同建築建物部分の505.08㎡である。

調査期間は平成19年2月1日～4月27日までである（調査番号0665）。調査面積は424㎡、遺物はコンテナ44箱分出土している。また、整理作業と報告書の刊行は平成20年度に行った。現地での発掘調査にあたっては東宝住宅株式会社をはじめとする関係の皆様から発掘調査について御理解いただくと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して深い感謝の意を表します。

2. 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

事業主体 東宝住宅株式会社

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財第一課

平成18・19年度

調査総括 山口謙治（埋蔵文化財第一課長）

山崎龍雄（埋蔵文化財第一課調査係長〔平成18年度〕）

米倉秀紀（埋蔵文化財第一課調査係長〔平成19年度〕）

調査庶務 文化財管理課 鈴木由喜

調査担当 埋蔵文化財第一課調査係 赤坂亨

調査作業 石川洋子 北條こず江 水田ミヨ子 林厚子 宗像正勝 福岡大 村山巳代子 濱地静子

相川春彦 許斐拓生 平田周二 定直康浩 安武憲史 櫻田恵理奈 中村理

平成20年度

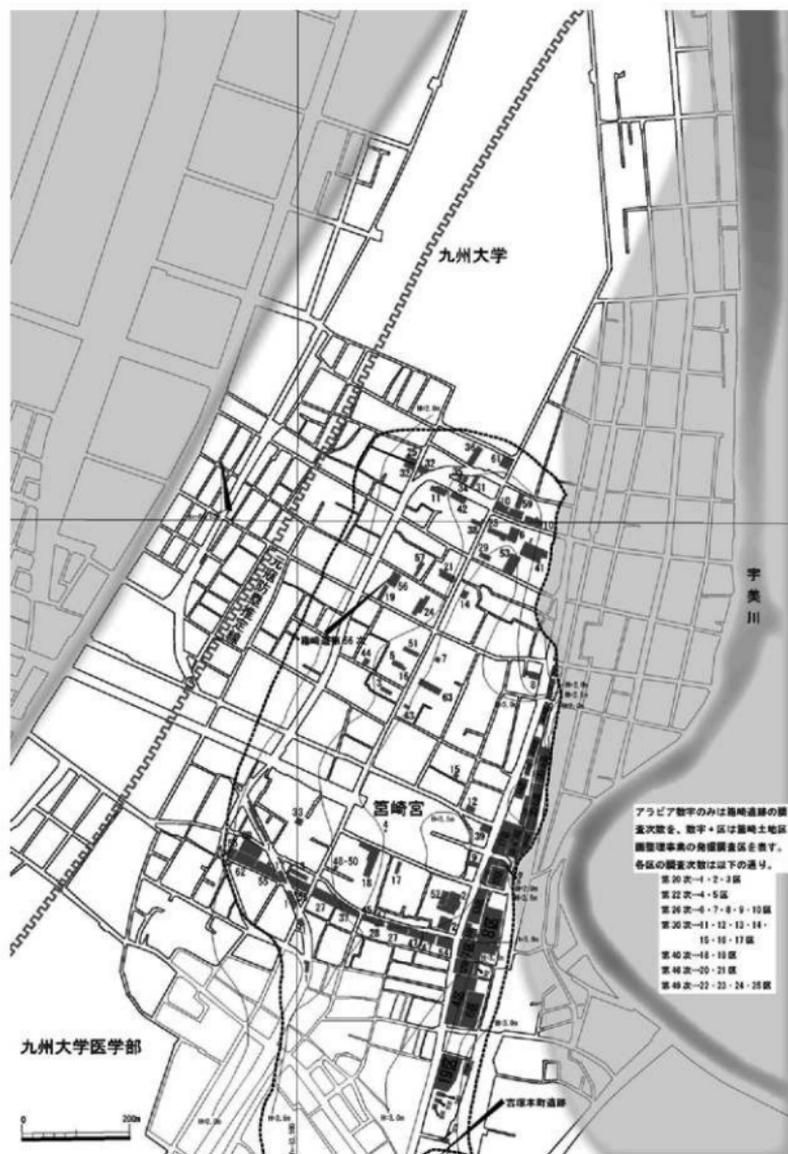
総括 山口謙治（埋蔵文化財第一課長）

米倉秀紀（埋蔵文化財第一課調査係長）

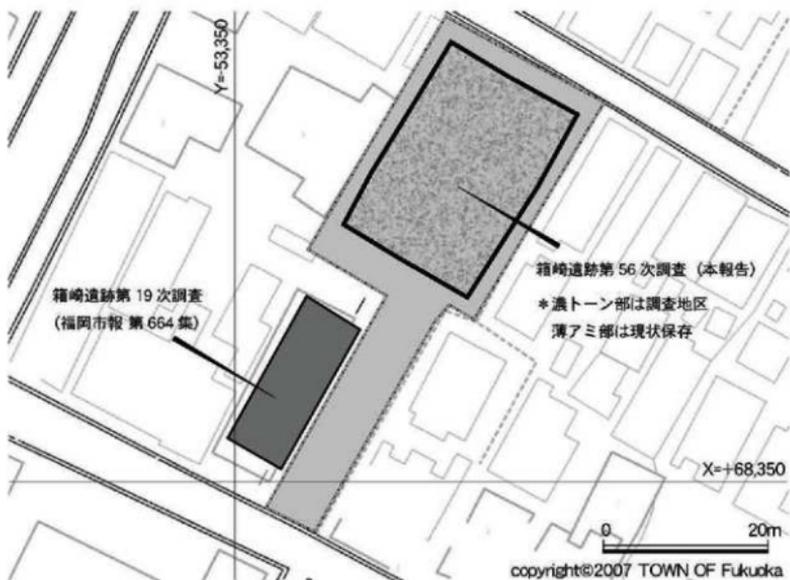
庶務 文化財管理課 古賀とも子

整理担当 福岡市博物館学芸課 赤坂亨

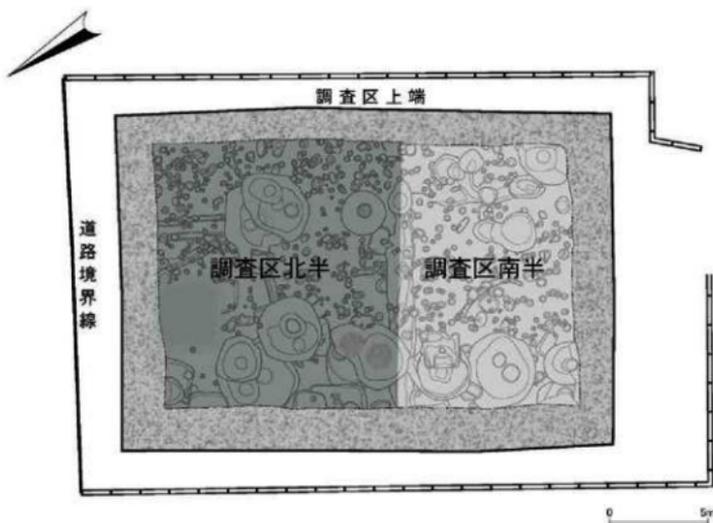
整理作業 石水久美子 小田敬子



第1図 箱崎遺跡調査地点位置図 (1/9,000)



第2図 箱崎遺跡第56次調査周辺図 (1/600)



第3図 箱崎遺跡第56次調査周辺図 (1/250)

II. 遺跡の立地と環境

箱崎遺跡は博多湾沿岸に形成された箱崎砂層と呼ばれる古砂丘北端上に立地する、古代～中世を中心とした遺跡である。北側を多々良川、西側を博多湾、東側を宇美川に画されている。砂丘は宮崎宮境内に標高3.5mのピークが存在し、現在の大学通りに沿って標高3.0mの尾根が北東方向にのび、その東西は緩やかな緩斜面になっている。箱崎遺跡第56次調査は箱崎遺跡の全体では北側であり、大学通りから西の標高2.0～2.5mの砂丘緩斜面に位置する（第1図）。第56次調査の北西側道路は商店街となっている。調査区の南西10mの地点で第19次調査が行われている（第2図）。第19次調査では12世紀後半から14世紀代の掘立柱建物・井戸・土坑・溝・ピットが検出されている。また第56次調査とほぼ同時期に道路を隔てた北西側で第57次調査が行われた。

III. 調査の記録

1. 概要

平成19年2月1日に機材搬入を行い調査に着手した。外柵設営など条件整備を行う。調査面積が狭いため、調査区を北半と南半に分け土砂を反転して調査を行うこととした(第3図)。2月1日から2月2日まで現物提供の重機により、調査区北半の表土掘削を行った。掘削終了後、別途重機を手配し、重機による遺構面までの表土すき取りを2月2日から2月3日まで行った。2月5日より作業員を入れ調査区北半の調査開始。遺構検出及び遺構掘削を行う。3月13日に調査区北半の遺構掘削と測量が完了。3月14日に調査区北半の全景撮影および一部掘り残した遺構の掘削を行う。3月15日から3月16日に重機による場内土砂反転および調査区南半の表土すき取りを行う。3月19日より作業員を入れ調査区南半の調査開始。遺構検出及び遺構掘削をおこなう。4月16日に調査区北半の遺構掘削と測量が完了。4月17日より調査区北半の全景撮影および一部掘り残した遺構の掘削を行う。4月19日に一部機材と遺物の撤収作業を行う。4月26日から4月27日に重機現物提供による埋め戻しを行い、4月27日に機材を完全に撤収し、調査を終了した。

調査地は箱崎遺跡西側の砂丘緩斜面に位置し、砂丘面の標高は北西付近で1.9～2.0m、南東付近で約2.0m、東側で1.9～2.0m、西側で約2.0mを測る。ほぼ水平だが、北側と西側にむかって緩やかに傾斜している。遺構は溝8、井戸21、土坑17、性格不明遺構2を検出した。井戸21基のうち3基は近現代の井戸である。時期は12世紀後半～14世紀が中心である。中世を遡る遺構は検出されなかった。遺物はパンケース44箱分出土した。土師器・輸入陶磁器・国産陶磁器・石製品などである。

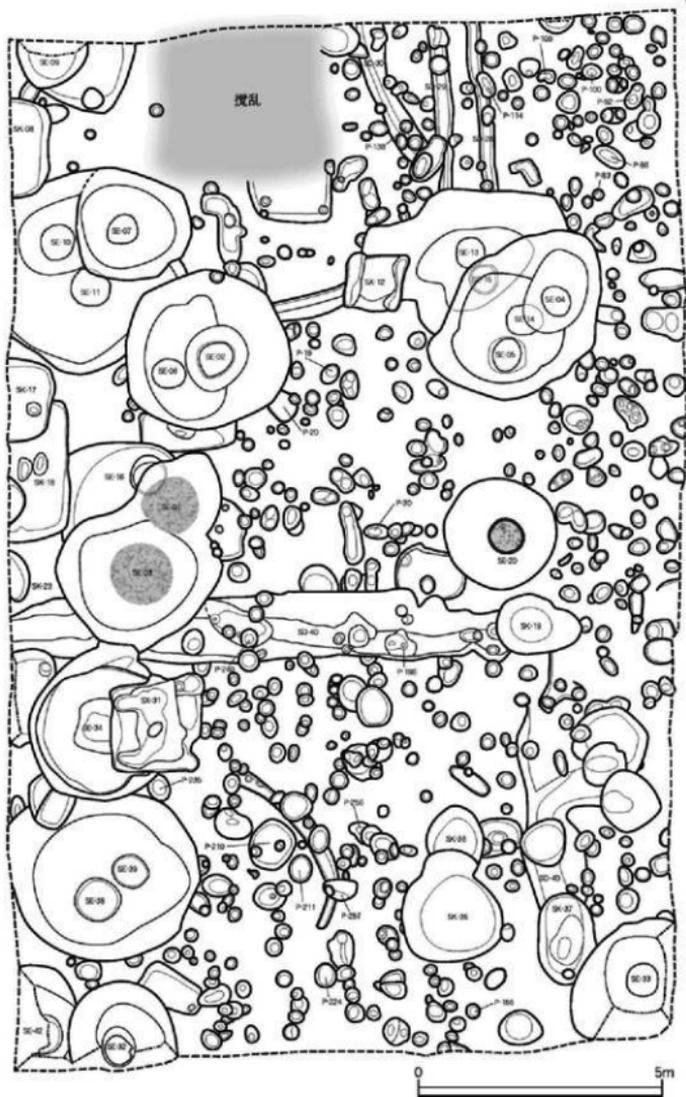
2. 遺構と遺物

記述は遺構数の多い井戸(SE)、土坑(SK)、溝(SD)、性格不明遺構(SX)、ピット(P)の順に行う。同種の遺構内では基本的に番号順に記述を行うが、遺構が重複している場合は、まとめて記述する。

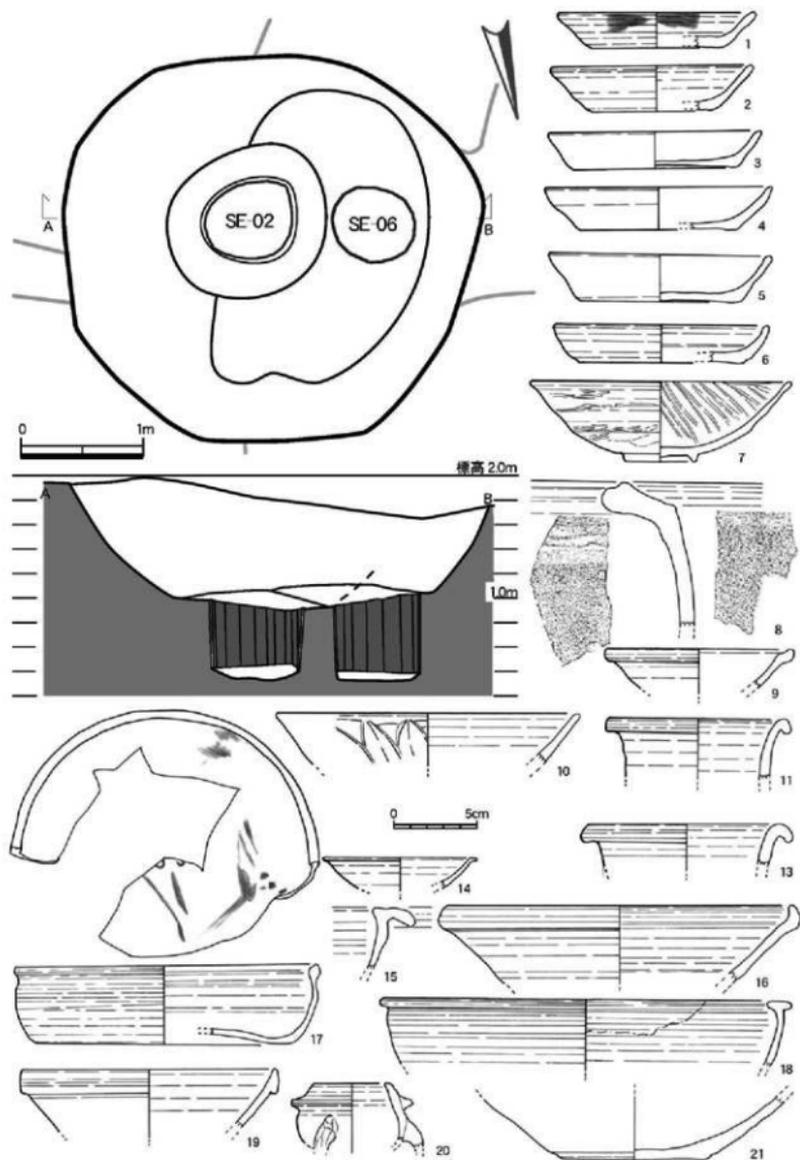
1. 井戸(SE)

SE-01・03・16(第6図)

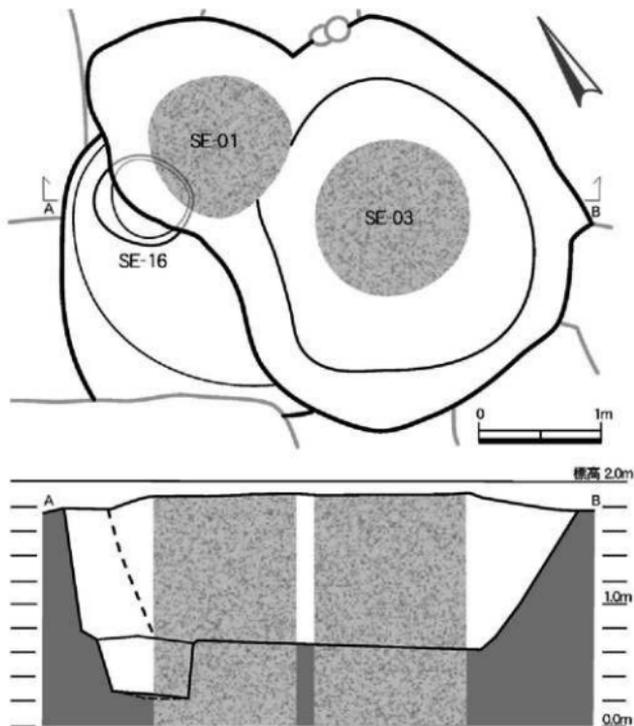
調査区北半西隅で検出した。SE-01と03は井筒の直径1.2mを測る、瓦を井筒に用いた近現代の井戸である。SE-16はSE-01・03とSK-18に切られており、上面で直径2.5m前後の平面円～楕円形を呈す



第4図 箱崎遺跡第56次調査遺構配置図 (1/100)



第5図 SE-02・06 (1/40)、SE-02出土遺物 (1/3)



第6図 SE-01・03・16 (1/40)

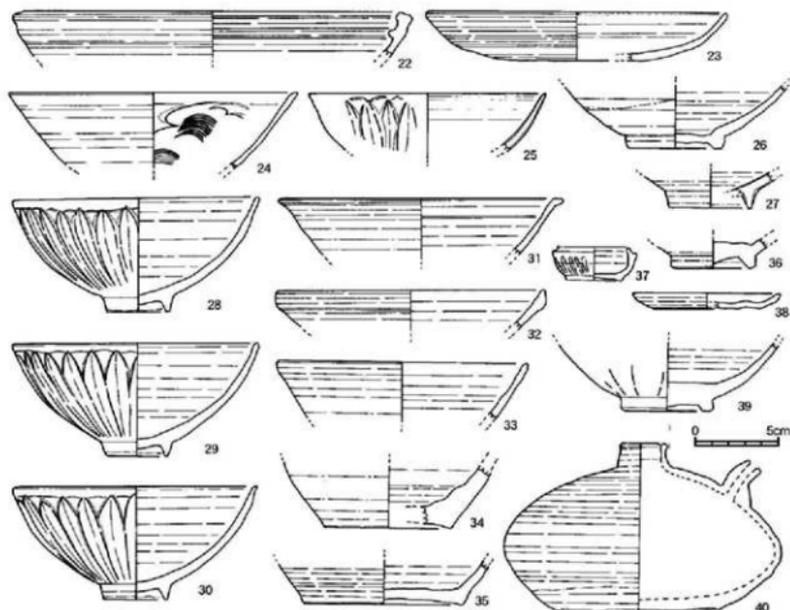
るとみられ、深さ150cmを測る。基底部中央に直径70cm、深さ50cmの井筒の痕跡がみられた。底面の標高は0.2mを測る。遺物はSE-03から土師器・陶器・青磁・白磁(第7図22~27)が出土した。SE-16の遺物も含むと考えられる。SE-16から土師器(第7図28~40、第10図65)が出土した。遺物は混在が多いが、SE-16の時期はおよそ13世紀であろう。

SE-02・06 (第5図)

調査区北半西側で検出した。上面では二つの井戸の切り合いの判別は付かず、上面で3.4×3.2mの平面楕円形を呈していた。深さはSE-02・06とも1.6mを測る。基底部中央に桶の痕跡がみられ、SE-02・06とも直径70cm、深さ70cm、底面の標高0.4mを測る。当初はSE-02単独の井戸だと考えて掘り下げたところ、基底部でSE-06の井筒を検出した。このため覆土の遺物はSE-02として取りあげている。前後関係はSE-06→SE-02である。遺物はSE-02から土師器・瓦器・青磁・白磁・土師質土器・須恵質土器(第5図1~11、13~21)が出土した。SE-02・06の時期は12世紀後半~13世紀である。

SE-04・05・13・14・15 (第8図)

調査区北半中央やや東で検出した。当初は3基の井戸が切り合ったものとして掘り下げたが、SE-05井筒検出時にSE-14を、SE-13井筒検出時にSE-15を検出し、合計5基の井戸が同一地点で切り合



第7図 SE-03・16出土遺物 (1/3)

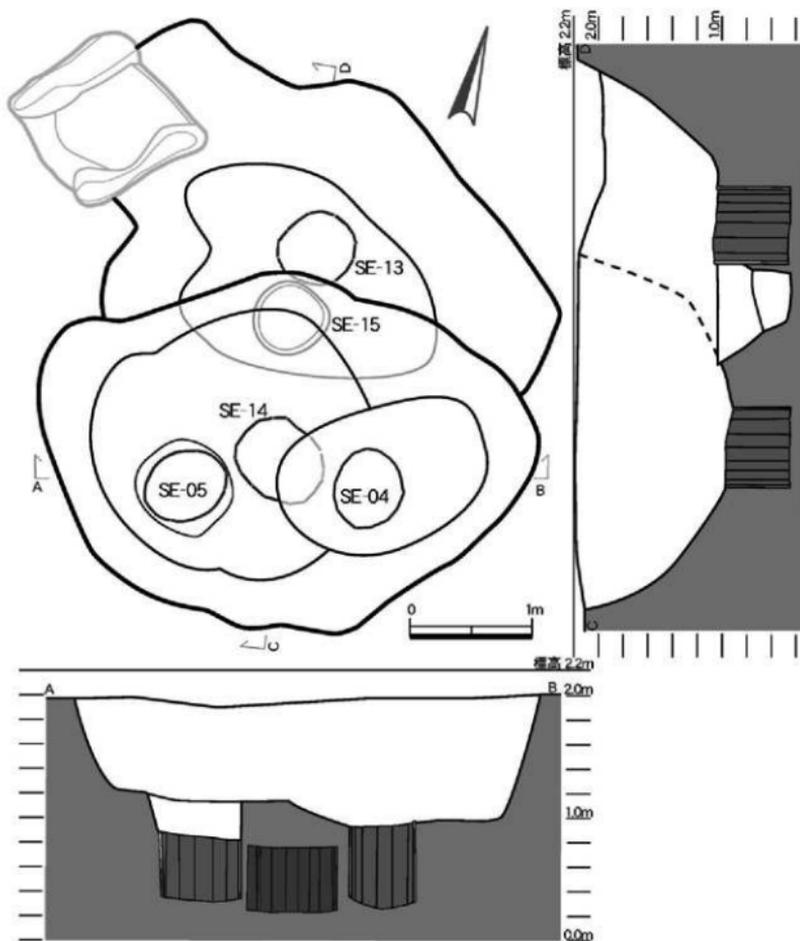
ったものと判明した。それぞれの井戸は上面で約2.2~2.5mの平面楕円形を呈すると考えられる。井筒はSE-04・05・13・14で桶の痕跡が、SE-15で井筒の痕跡がみられた。底面の標高は0.2mで共通している。前後関係はSE-15→13→14→05→04である。遺物はSE-04から白磁・青磁・瓦質土器(第9図41~45)が、SE-05から青磁・白磁・陶器・土師器(第9図46~58)が、SE-13から土師器・瓦器・青磁・白磁・土師質土器・須恵質土器(第14図135~156)が、SE-14から青磁・白磁(第9図59~60)が、SE-15から青磁・陶器・土師器(第14図157~162)が出土した。時期はSE-15が12世紀中~後半、SE-13が13世紀、SE-04・05・14が12世紀後半~13世紀である。

SE-07・10・11 (第10図)

調査区北半北寄りて検出した。当初は2基の井戸が切り合ったものとして掘り下げたが、SE-10井筒検出時にSE-11を検出し、合計3基の井戸が同一地点で切り合ったものと判明した。SE-07は上面で2.3×2.2mの平面隅丸長方形を呈し、深さ1.6mを測る。遺構SE-07・10・11とも桶の痕跡が残り、底面の標高は0.2mで共通している。前後関係はSE-11→10→07である。またSE-10・11はSE-02・06に切られている。遺物はSE-07から土師器・青磁・白磁・陶器・須恵質土器・石製品(第11図70~77、79~98)が、SE-10から白磁・陶器・瓦器(第10図61~64)が、SE-11から青磁・白磁・土師器(第10図65~69)が出土した。時期はSE-11・10が13世紀、SE-07が13世紀中~後半である。

SE-09 (第12図)

調査区北半北隅で一部を検出した。上面は1.5×1.0mの平面半円形を呈し、深さ1.2mを測る。井筒の底面までは完掘できなかった。当初は直径2.4mの半円形の井戸として掘り下げたが、深さ30cmの

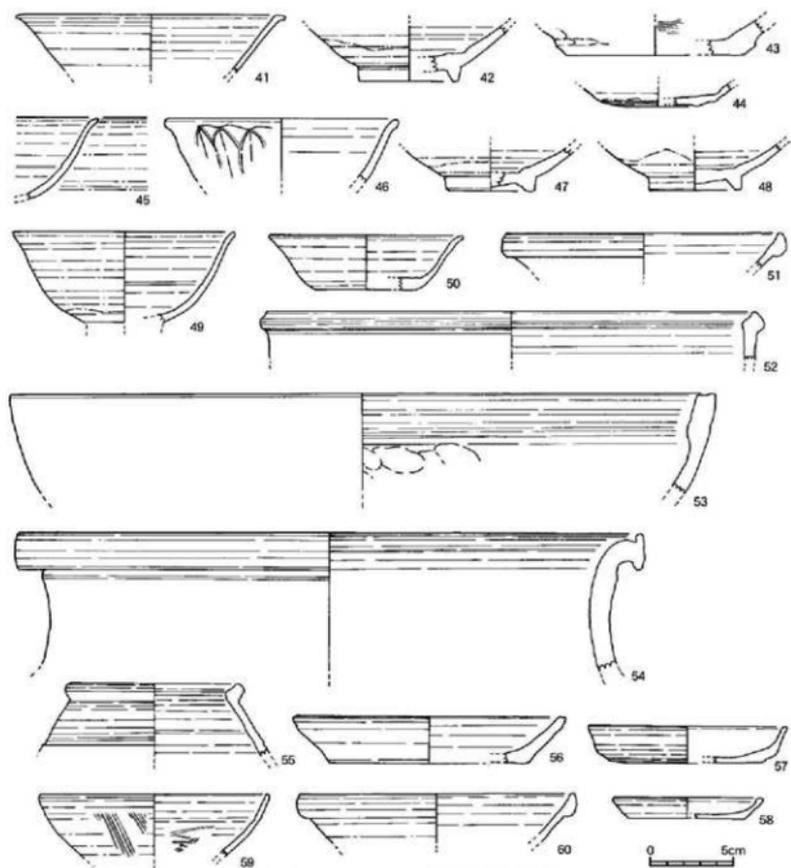


第8図 SE-04・05・13・14・15 (1/40)

土坑を井戸が切っていたことが判明した。この土坑の遺物もSE-09の遺物として取りあげている。遺物は青磁・白磁・陶器・土師器（第13図99～113）が出土した。時期は12世紀後半～13世紀である。

SE-20（第4図）

調査区北半南寄りで検出した。上面は直径2.3mの平面円形を呈し、井筒の直径0.7mを測る、瓦を井筒に用いた近現代の井戸である。遺物は遺構覆土から近現代の遺物と共に青磁・白磁・陶器・土師器（第13図114～118）が出土した。



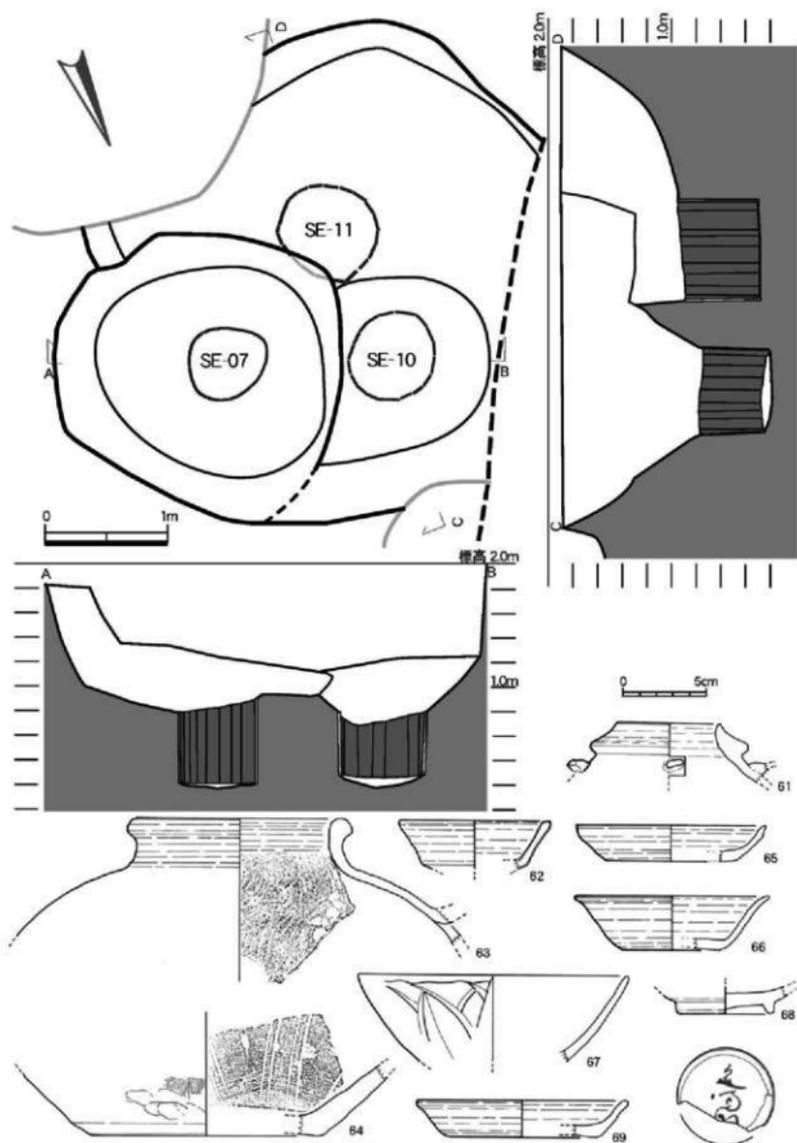
第9図 SE-04・05・14出土遺物 (1/3)

SE-32・42 (第15図)

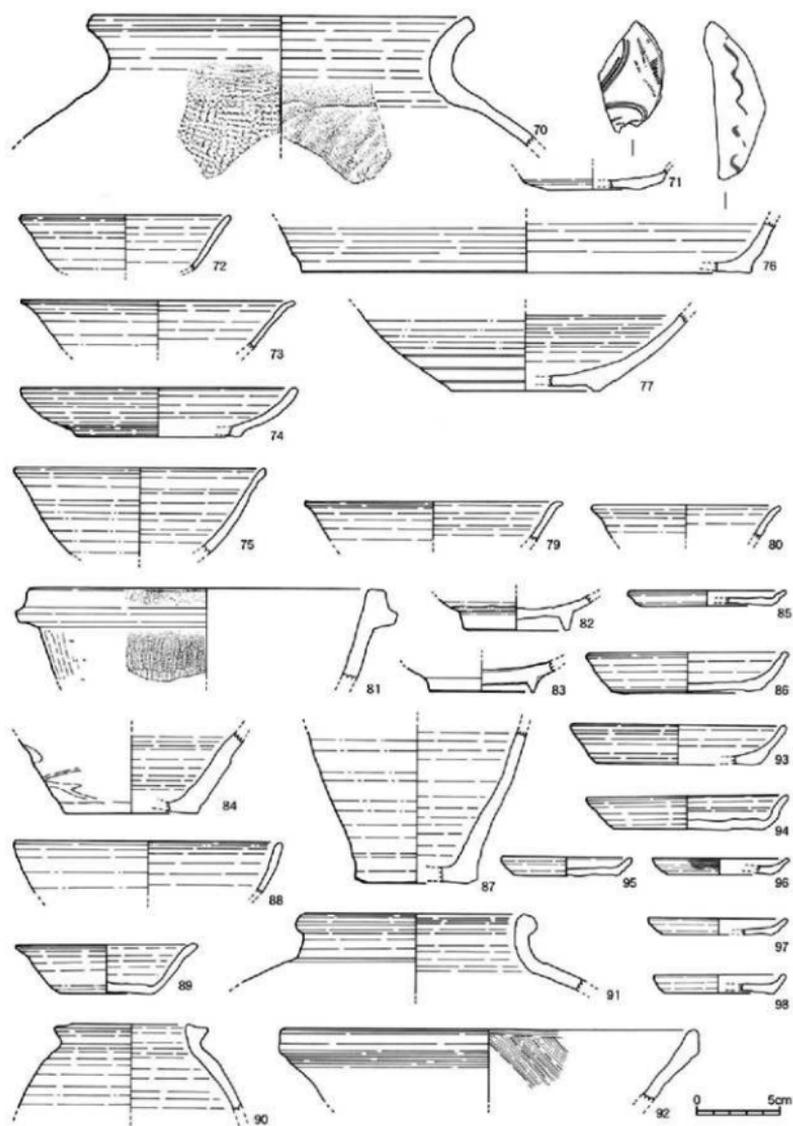
調査区南半西隅で一部を検出した。SE-32は上面で2.2×1.6mの平面半円形を呈し、深さ1.5mを測る。桶の痕跡が残り、底面の標高は0.4mである。SE-42は上面で1.3×2.0mの平面半円形を呈し、深さ1.7mを測る。井筒の痕跡が残り、底面の標高は0.2mである。前後関係はSE-42→32である。遺物はSE-32から土師器・青磁・白磁・土師質土器(第16図163~173、179、187)が出土した。SE-42からは図示できる遺物は出土しなかった。時期はSE-32が12世紀後半である。

SE-33 (第12図)

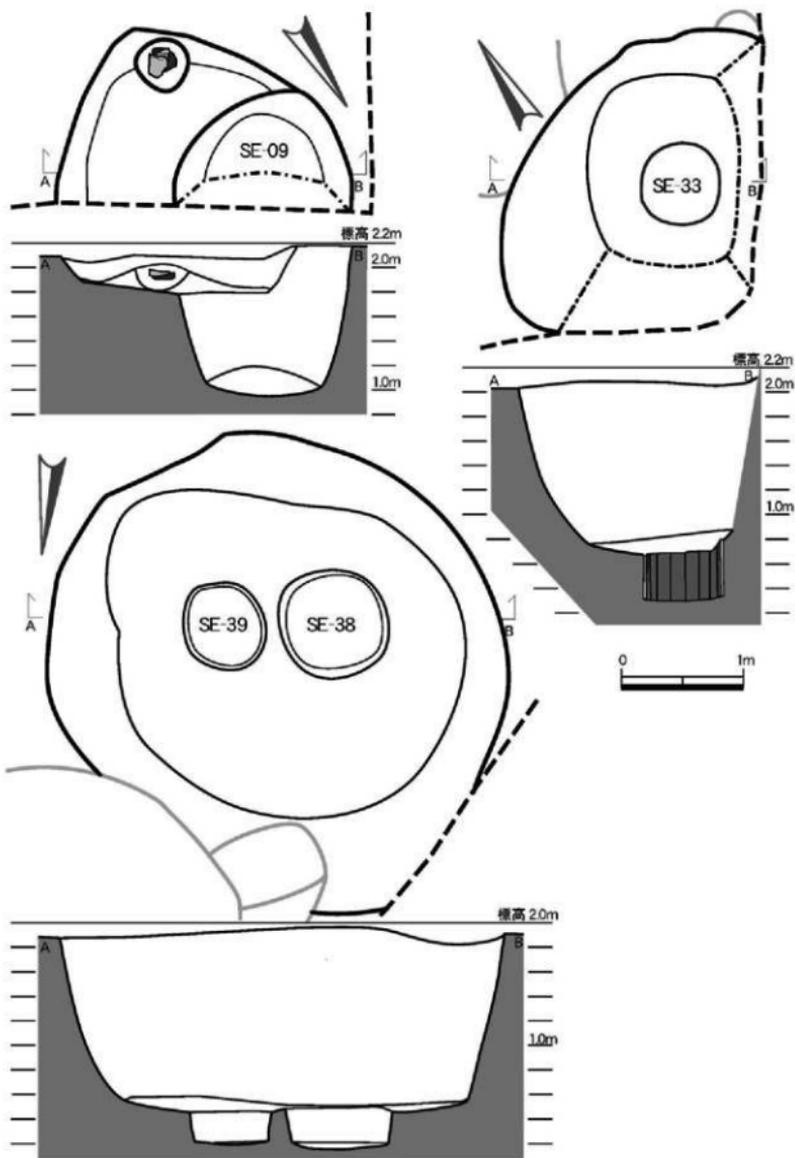
調査区南半北隅で一部を検出した。上面で2.5×2.2mの平面半円形を呈し、深さ1.8mを測る。桶の痕跡が残り、底面の標高は0.4mである。遺物は土師器・青磁・白磁・陶器(第16図174~178、180~186、188・189・329)が出土した。時期は12世紀後半~13世紀である。



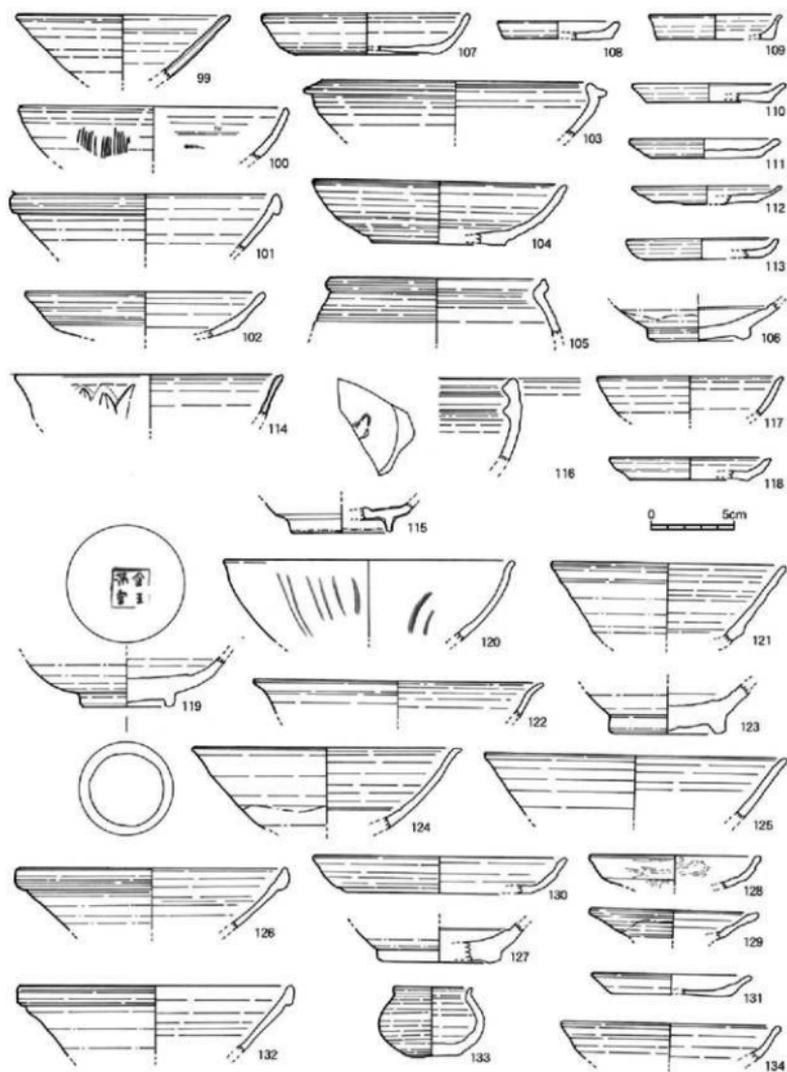
第10図 SE-07・10・11 (1/40)、SE-10・11・16出土遺物 (1/3)



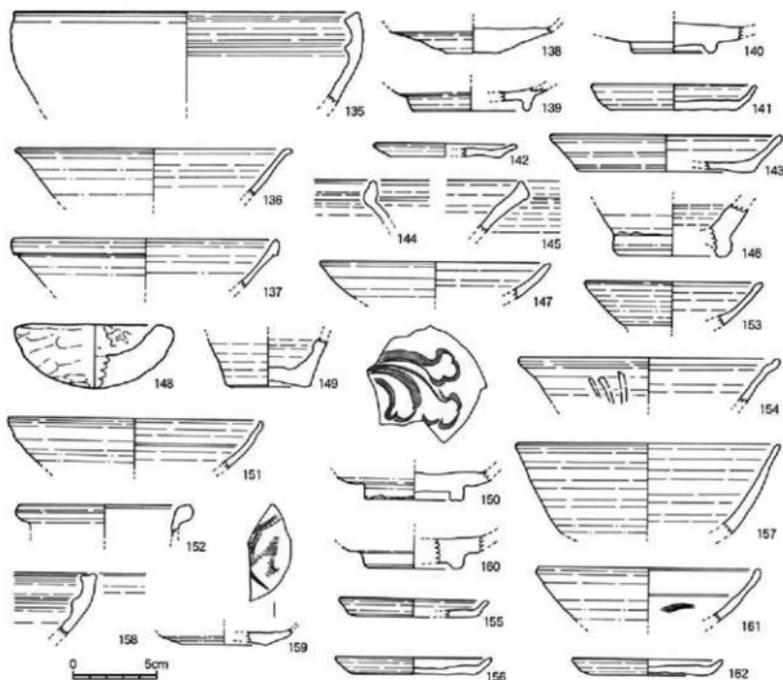
第11図 SE-07出土遺物 (1/3)



第12図 SE-09・33・38・39 (1/40)



第13図 SE-09・20・38・39、SK-35出土遺物 (1/3)



第14図 SE-13・15出土遺物 (1/3)

SE-34 (第15図)

調査区南半北隅で検出した。上面で3.2×2.8mの平面楕円形を呈し、深さ1.5mを測る。基底部中央で1.3×1.1m、深さ0.2mの土坑を検出した。底面の標高は0.6mであり、井筒の痕跡と見られる。SE-34は他の井戸と異なり、井筒を抜き取ってから埋めた可能性がある。遺物は土師器・青磁・白磁・瓦器（第16図190～195）が出土した。時期は12世紀後半～13世紀である。

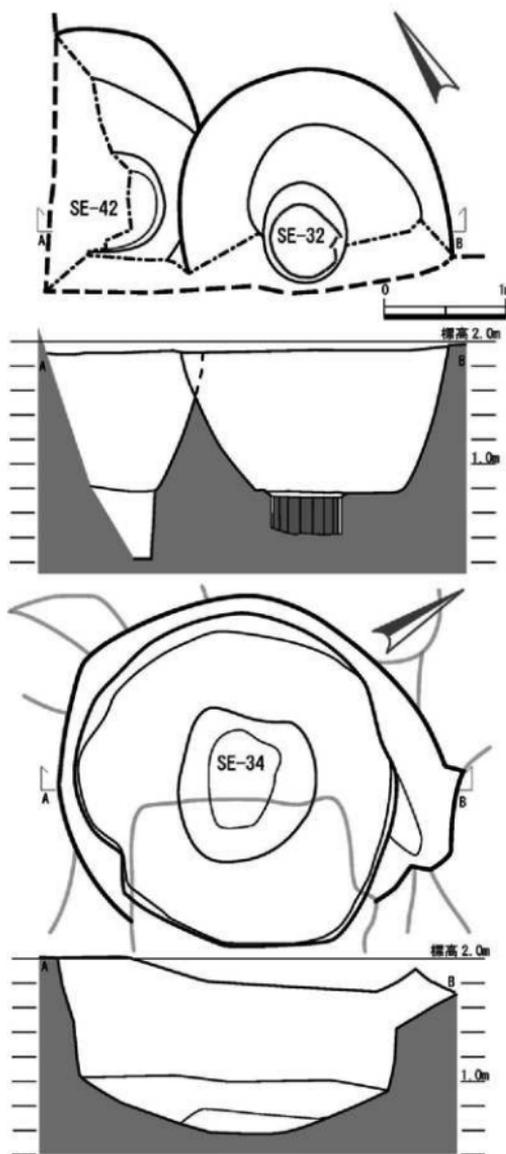
SE-38・39 (第12図)

調査区南半北西寄りて検出した。当初は1基の井戸として掘り下げたが、基底部まで掘り下げたときにSE-38・39の二つの井筒を検出し、2基の井戸が同一地点で切り合ったものと判明した。前後関係は不明である。それぞれの井戸は上面で約2.2～2.5mの平面円ないし楕円形を呈するとみられる。井筒はSE-38・39ともに井筒の痕跡がみられた。底面の標高は0.2mで共通している。SE-38・39覆土から土師器・青磁・白磁・瓦器（第13図119～130、132）が、SE-39から土師器(第13図131)が出土した。時期は12世紀中頃～後半である。

2. 土坑 (SK)

SK-08 (第17図)

調査区北半北隅で一部を検出した。平面2.1×0.7 m、深さ0.5mを測り、隅丸方形の土坑の半分と考



第15図 SE-32・34・42 (1/40)

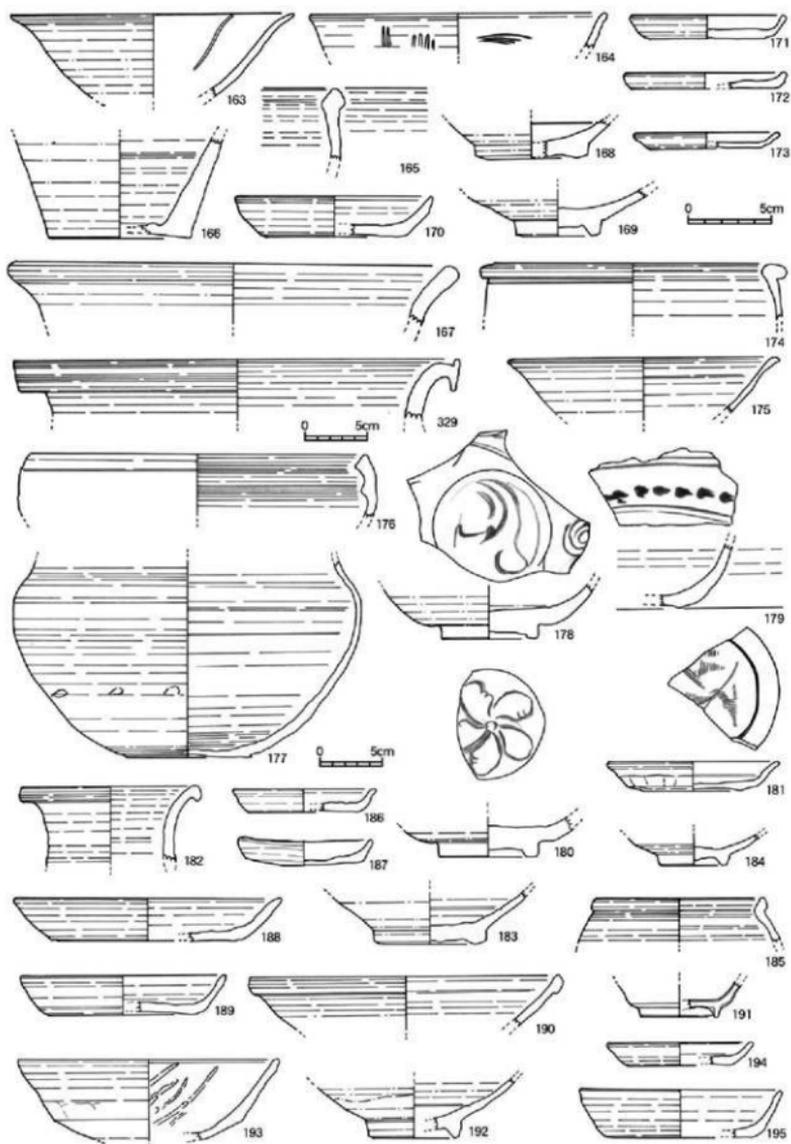
えられる。底面はほぼ水平で、標高1.6mである。南西でSE-10・11を切っている。遺物は白磁・土師器(第18図196~206)が出土した。時期は12世紀後半である。

SK-17・18 (第17図)

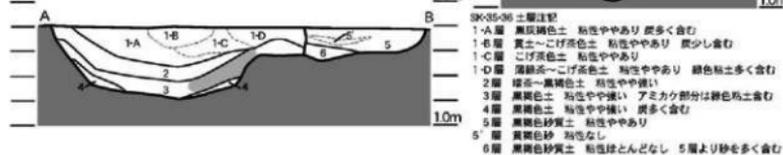
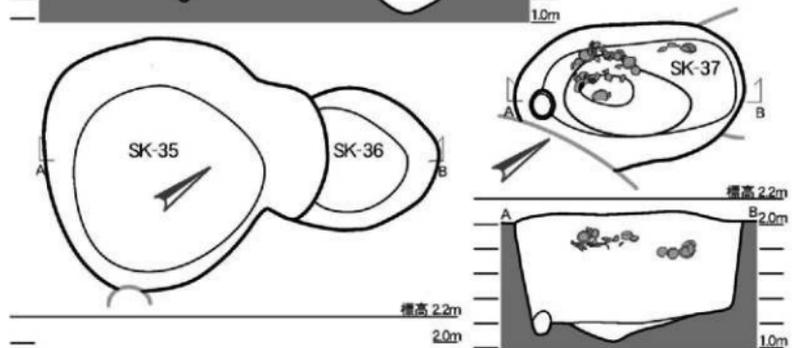
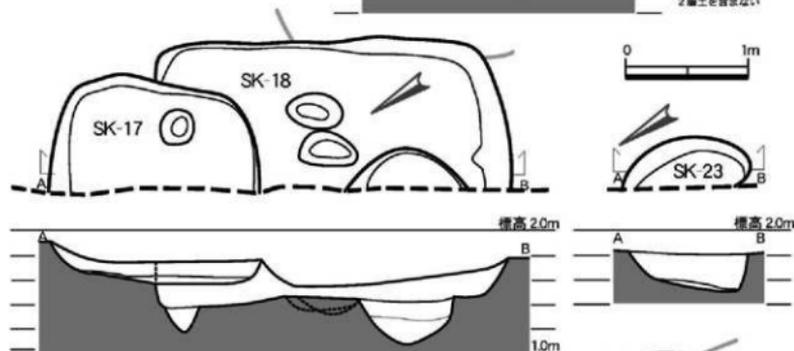
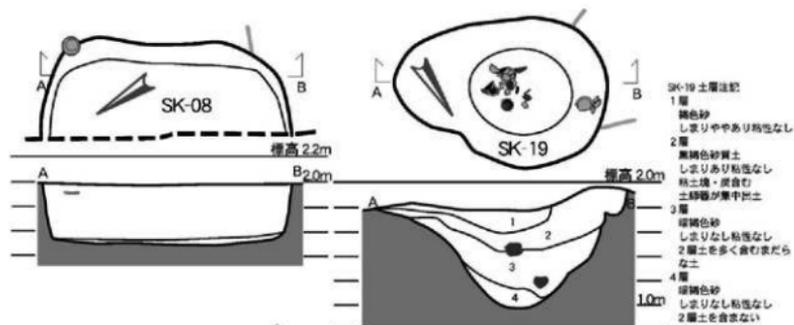
調査区北半西隅で一部を検出した。SK-17は平面1.7×1.0m深さ0.15mを測り、SK-18は平面2.8×1.2m深さ0.4mを測る。SK-17・18とも隅丸方形の土坑の一部と考えられる。SK-17は底面にピットはなく、SK-18は底面にピット3基を検出した。壁際のやや大きなピットは壁面土層観察の結果SK-18とは別の遺構であり、SK-22とした。前後関係はSK-18→17、SK18→22である。またSK-18は南側でSE-16を切っている。遺物はSK-17から白磁・青磁・土師器(第18図207~213)が、SK-18から白磁・青磁・陶器・土師器(第18図214~219, 330)が出土した。時期はSK-17が13世紀後半~14世紀、SK-18が13世紀である。

SK-19 (第17図)

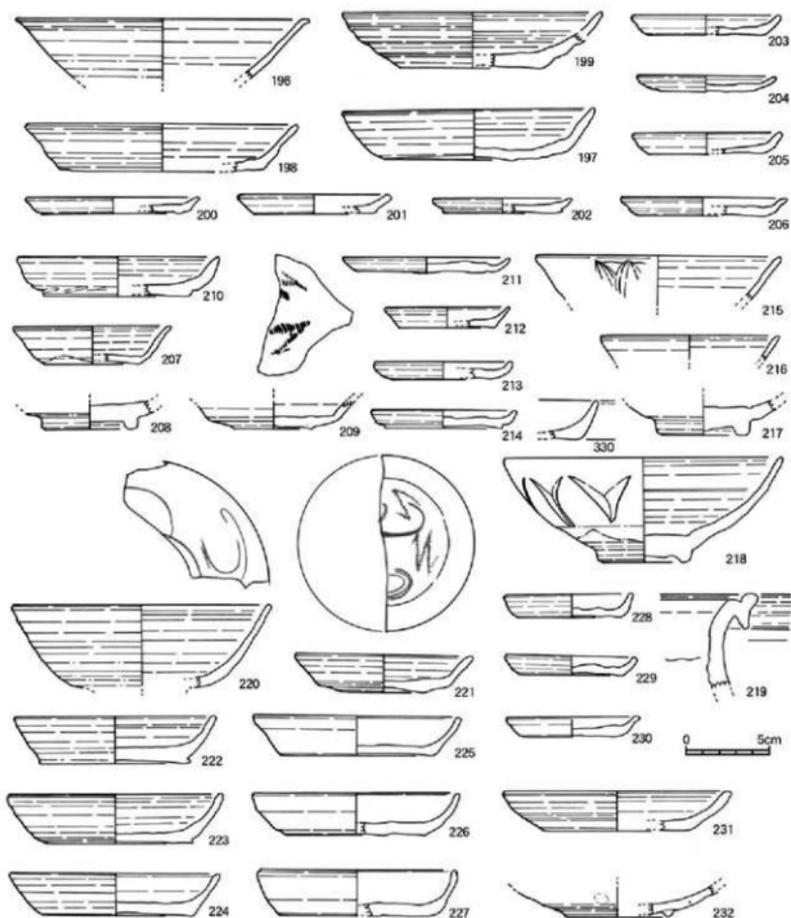
調査区北半南寄りて一部を検出し、南半調査時に全体を検出した。北半調査時はS-19、南半調査時はS-47として遺物取り上げを行ったが、土層の調査でS-19とした部分が第1・2層に当たると判断し、S-19とS-47をSK-19に統合した。平面1.8×1.2mの楕円形を呈し、深さ0.8mを測る。完掘時の遺構形状は井戸と良く類似していたが(PL8-3)、土層の2層から土師器が集中して出土したこと(巻頭図版2-2)と、他の井戸のように水平な土層



第16図 SE-32・33・34出土遺物 (1/3・1/4)



第17図 SK-08・17・18・19・23・35・36・37 (1/40)

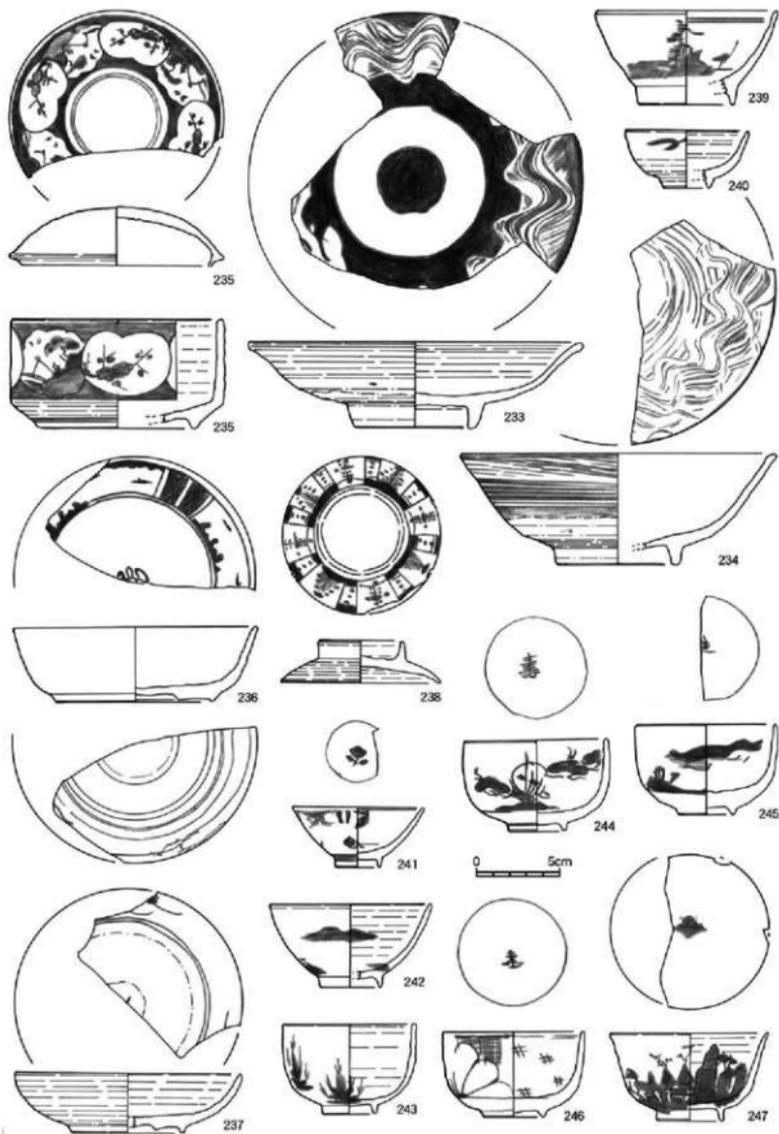


第18図 SK-08・17・18・19・23出土遺物 (1/3)

堆積でないこと、直径10～20cmの小レキを含むこと、底面の標高が1.0mと他の井戸に比べて浅いことなどから、土坑として取り扱った。北西側のSD-40の南東端に位置するが、両者の関係は不明である。切り合いから前後関係はSD-40→SK-19である。遺物は青磁・土師器（第18図220～230）が出土した。時期は13世紀である。

SK-23（第17図）

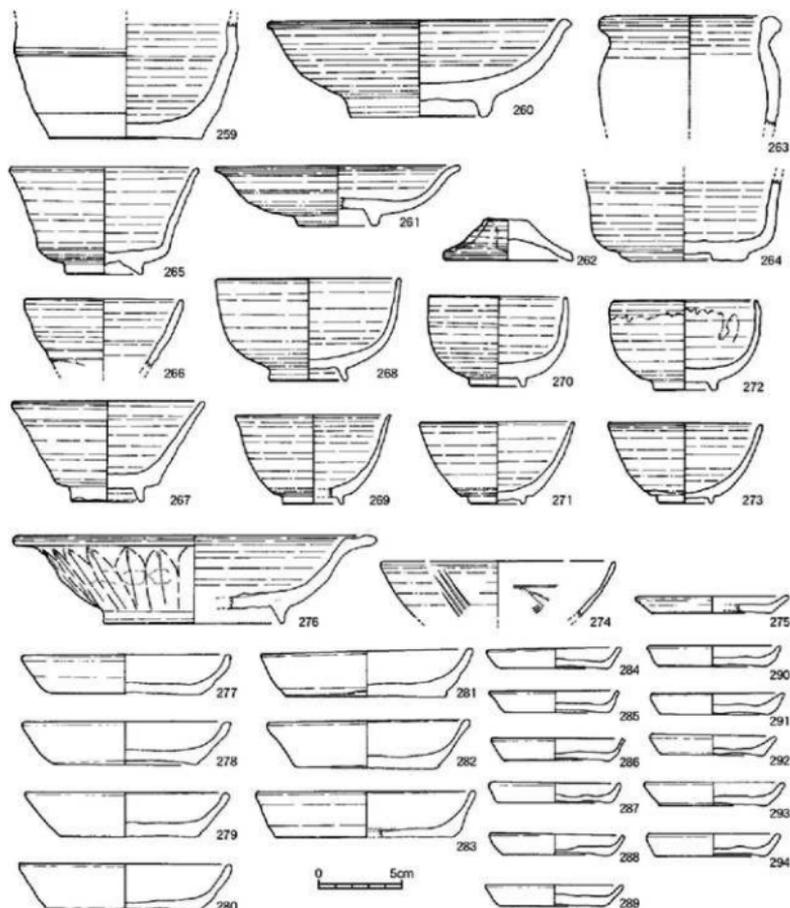
調査区北半西隅で一部を検出した。上面で1.0×0.4mの平面半円形を呈し、深さ0.3mを測る。遺物は土師器・瓦器（第18図231・232）が出土した。時期は12世紀後半～13世紀である。



第19図 SK-35出土遺物その1 (1/3)



第20図 SK-35出土遺物その2 (1/3・1/4)



第21図 SK-35・36・37出土遺物 (1/3)

SK-35・36 (第17図)

調査区南半南寄りで検出した。SK-35は上面で 2.2×2.1 mの平面円形を呈し深さ0.6mを測る。SK-36は上面で 1.3×1.2 mの平面楕円形を呈し深さ0.3mを測る。土層観察の結果、前後関係はSK-36→35と判明した。SK-35は他の遺構に比べると覆土の黒色が強い。SK-35の1-A・1-B層から多量の陶磁器が出土した。陶磁器は炭とともに乱れた状態で出土しており、SK-35は廃棄土坑とみられる。遺物はSK-35から陶器・磁器・土師質土器(第19図233~247、第20図248~258、第21図259~273)が、SK-36から青磁・土師器(第21図274・275)が出土した。時期はSK-36が12世紀後半~13世紀である。SK-35出土遺物は多様な陶磁器を含むが、最も新しい時期の遺物から19世紀中頃に廃棄されたも

のとみられる。

SK-37 (第17図)

調査区南半南隅で検出した。上面で1.8×1.1mの平面楕円形を呈し深さ1.0mを測る。底面は中央やや凹んでいる。南側でSE-33に切られ、北側でSD-40を切っている。上層から多量の土師器がまとまって出土した(巻頭図版2-3)。SK-19と同様にSD-40の南端に位置しているが、両者の関係は不明である。遺物は土師器・青磁(第21図276~294)が出土している。時期は13世紀後半~14世紀前半である。

3. 溝 (SD)

SD-28・29・30 (第22図)

調査区北半東側で一部を検出した。ほぼ併行して南北に走る、幅0.3~0.5m深さ0.2~0.4mを測る3条の溝である。南側でSE-13に切られ、北側は調査区外に伸びている。SD-28・29は現在の箱崎の街区とほぼ併行である。遺物はSD-29から白磁・青磁・土師器(第23図303~305)が出土している。SD-28・30からは図化可能な遺物は出土しなかった。SD-29の時期は12世紀後半~13世紀である。

SD-40 (第22図)

調査区北半西南側で一部を検出したが掘り下げは行わず、調査区南半で全体を検出した後に掘り下げを行った。当初はN-60°-W方向に走る幅1.3m深さ0.2~0.5mの溝と、それにほぼ直交のN-25°-E方向に走る幅1.2m深さ0.2mの溝を別々の遺構とし、またN-60°-Wの溝にも複数の遺構番号を付けていたが、直角に曲がる一連の遺構としてS-21・24もSD-40に統合した。SK-19からN-25°-Eの溝へ角度を変える付近で溝の痕跡がやや消えるが、遺構検出時は直角方向の溝として確認できた。N-60°-Wの溝の南東端にSK-19が、N-25°-Eの溝の南端にSK-37が位置しており、またどちらの土坑からも土師器群が出土していることからSD-40はSK-19・37と一連の遺構の可能性があるが、両者の関係や遺構の性格は不明である。遺物は白磁・青磁・陶器・土師器(第23図296~302)が出土した。時期は12世紀後半~13世紀である。

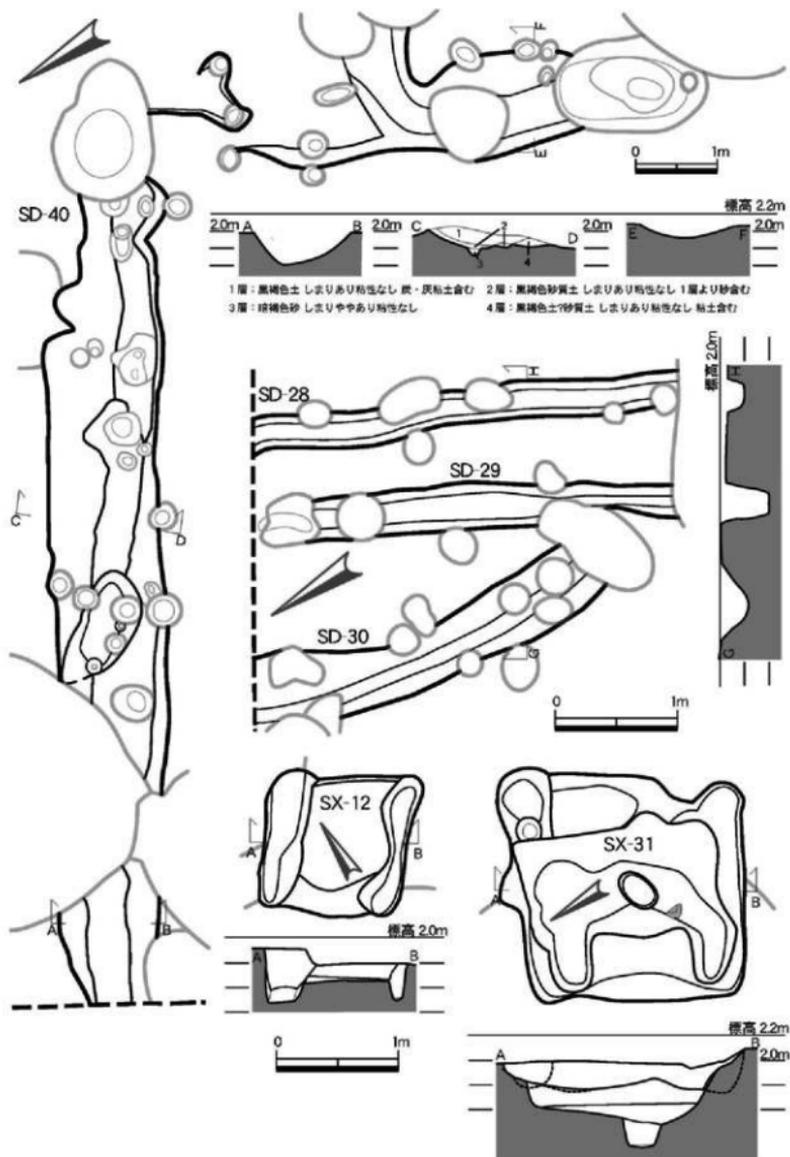
4. 性格不明遺構 (SX)

SX-12 (第22図)

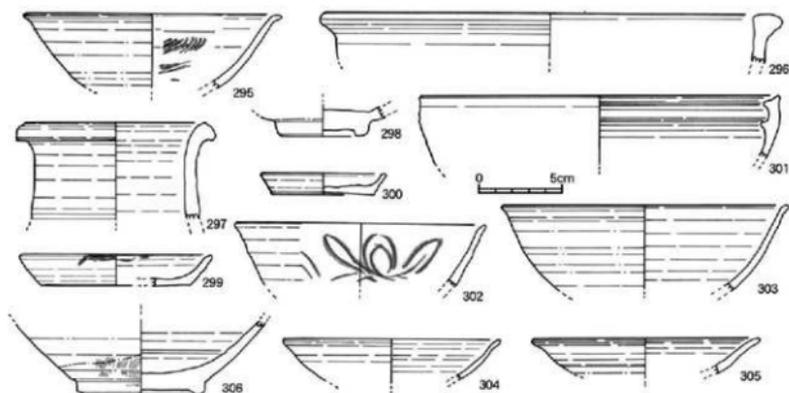
調査区北半中央付近で検出した。平面1.2×1.2 mの隅丸方形を呈する。底面は南東辺と北西辺に沿った部分が幅0.2~0.3m深さ0.4mの溝状となり、中央部はほぼ水平で標高1.6mである。西側でSE-13を切っている。遺構覆土は暗灰~黒褐色を呈している。また、底面の砂が被熱を受けたような褐色を呈している。西側で切っている溝から鉄滓が出土しており、鍛冶関連遺構の可能性がある。図化可能な遺物は出土しなかった。時期はSE-13よりは新しいが詳細は不明。

SX-31 (第22図)

調査区南半北隅で検出した。SE34の上に構築されている。平面1.7×1.8 mの隅丸方形を呈する。底面は北辺と南辺に沿った部分が幅0.3m深さ0.4mの溝状となり、中央部は西側に開いたコの字状に凹み、中央部分に0.3×0.2m底面からの深さ0.2mを測るビットを有する。遺構覆土は灰~黒褐色を呈し、底面の砂は被熱を受けたような褐色を呈している(巻頭図版2-1)。SX-12同様、鍛冶関連遺構の可能性がある。遺物は底面ビット付近から白磁R-1(第23図306)が出土している。白磁の時期は12世紀後半頃だが、SE-34の時期が12世紀後半~13世紀であり、こちらに伴うものの可能性がある。従ってSX-31の時期はSE-34よりは新しいが詳細は不明といえる。



第22図 SD-28・29・30・40, SX-12・31 (1/40・1/60)



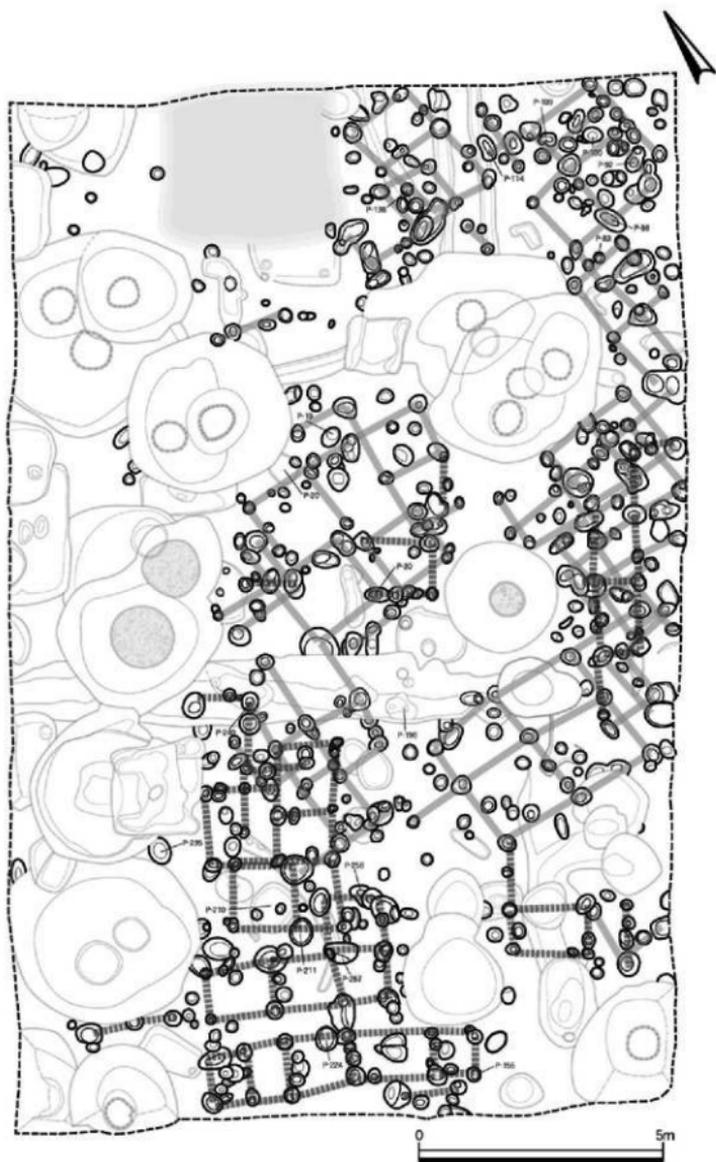
第23図 SD-29・40、SX-31出土遺物 (1/3)

5. ピット (P)

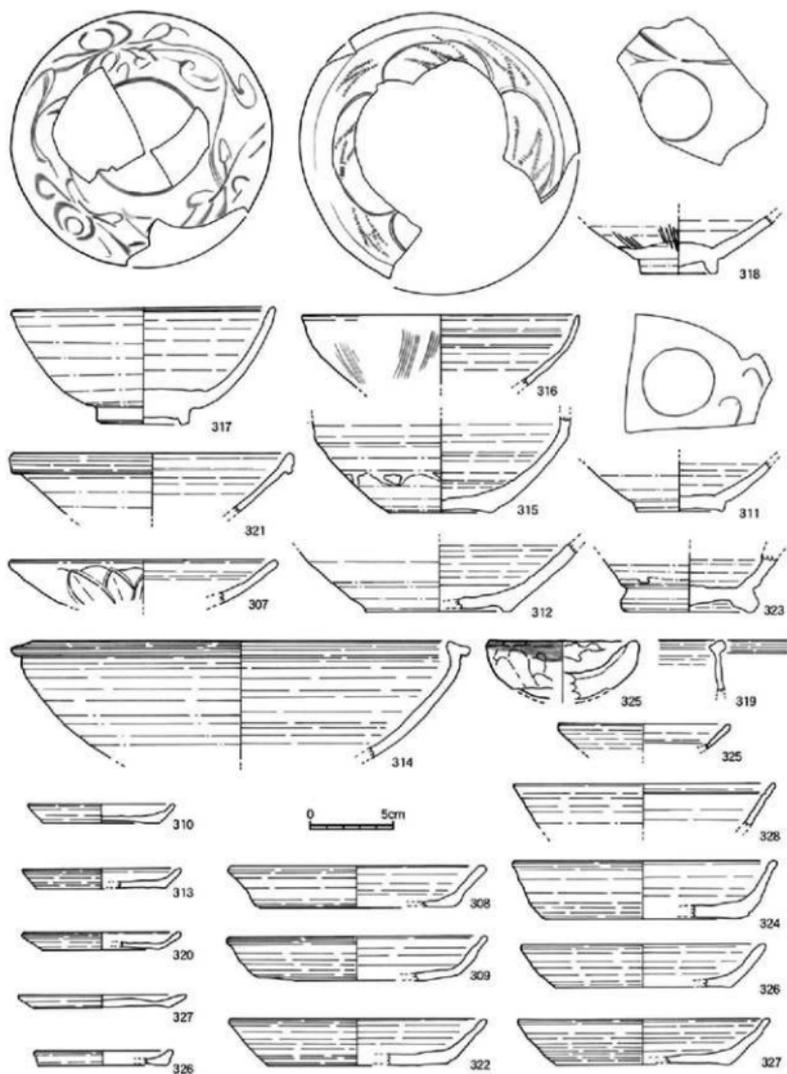
調査区全体で300を超えるピットが検出された。掘立柱建物の柱が含まれていると思われるが、確実に復元できたものはなかった。ピットの配置と並びの傾向を第24図に示したが、調査区北半ではほぼ北-南、東-西方向に並ぶ柱が多い(第24図実線)のに対し、調査区南半では、現在の街区に沿うN-60°-W、N-30°-E方向に並ぶ柱が多い(第24図点線)ようである。ピットからは青磁・青白磁・白磁・陶器・土師器・取り瓶が出土している(第25図307~328)。調査区南半のピット出土遺物の方が12世紀にあたる遺物を出土している傾向があるが、柱並びに時期差を認められる程ではない。

IV. 小結

隣接する箱崎遺跡第19次調査と比較しつつ、第56次調査の遺構の内容を検討していく。第19・56次どちらの調査区も遺構の時期は12世紀後半~14世紀であり、この時期の遺構が調査区周辺に広がっていたことが想定できる。個別の遺構では井戸が多く、特に56次調査では同じ場所に複数の井戸を構築しており、井戸が埋没する度に同じ場所に作り続けた状況を想定できる。柱穴については調査区南半と北半で二つの柱並びの傾向があることが確認できた。両者に明確な時期差は見いだせていない。第19次の掘立柱建物SB18の柱並び方向は、第56次調査区南半の柱並び方向に近いが、第19次調査の柱並びには、第56次調査北半の柱並びの方向と近いものもあるようにみえ、混在していた可能性がある。箱崎遺跡における溝と土坑の方向とその性格、柱並びの方向の解明は、箱崎の現在の街区の成立がいつに遡るのかを考える上で重要な問題であり、今後も周辺調査の事例の集積を待ちつつ、遺跡全体で検討していく問題であるといえよう。また、近世の廃棄土坑SX-35の一括陶磁器群も19世紀に使用された陶磁器の組み合わせの好例を示すといえるだろう。



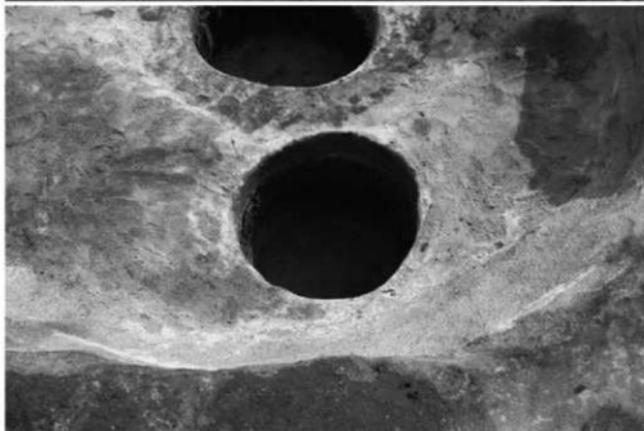
第24図 箱崎遺跡第56図調査ビット配置図 (1/100)



第25図 ビット出土遺物 (1/3)



1. SE-02・06 (西から)



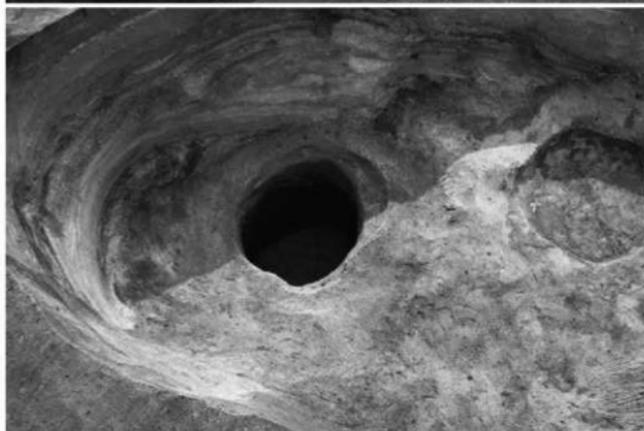
2. SE-06完掘状況
(西から)



3. SE-01・03 (南から)



1. SE-16完掘状況 (東から)



2. SE-04・05 (北東から)

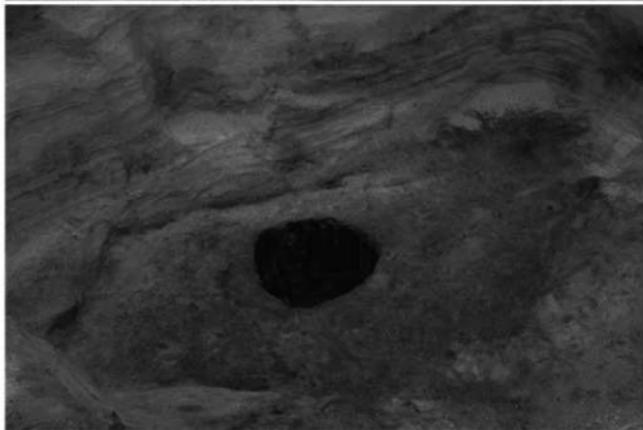


3. SE-05完掘状況 (南から)

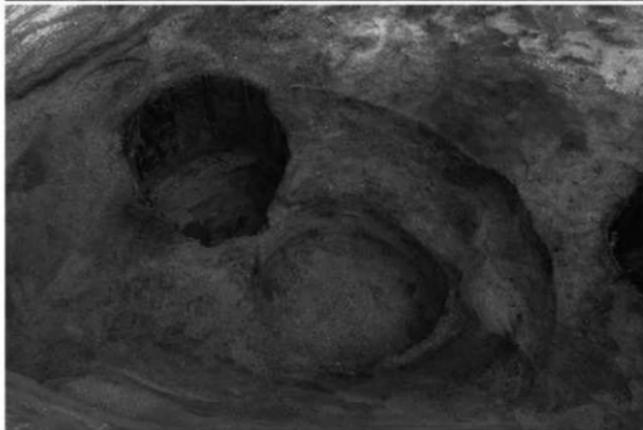
1. SE-14完掘状況
(西から)



2. SE-13 (南から)



3. SE-15完掘状況
(南から)





1. SE-10 (東から)



2. SE-11完掘状況 (北西から)



3. SE-09 (南から)



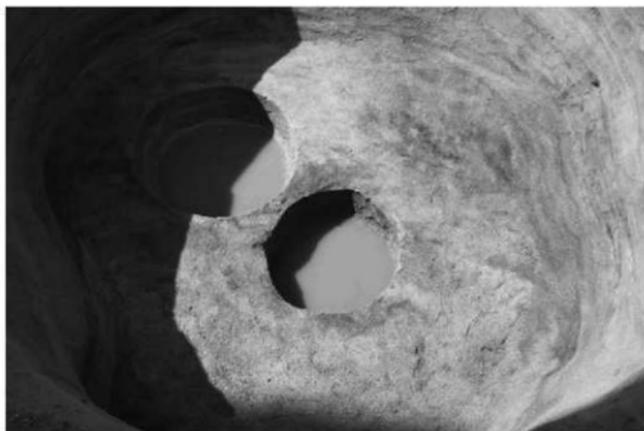
1. SE-09 (北から)



2. SE-33 (西から)



3. SE-33 (南から)



1. SE-38・39完掘状況
(東から)



2. SE-32 (北から)



3. SE-32井筒完掘状況
(北から)

1. SE-42 (北から)

2. SE-34完掘状況
(西から)

3. SK-08 (東から)





1. SK-17 (西から)



2. SK-19半截状況
(北から)



3. SK-19完掘状況
(北から)

1. SK-35・36完掘状況
(南から)



2. SK-35・36完掘状況
(北から)



3. SK-37完掘状況
(北東から)





1. SX-12完掘状況
(東から)



2. SX-31完掘状況
(東から)



3. 箱崎遺跡第57次調査
を望む (北東方向)

報告書抄録

ふりがな	はこぎき						
書名	箱崎37 一箱崎遺跡第56次調査報告一						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	1047						
編著者名	赤坂亨						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1						
発行年月日	西暦2009年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査機関	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	°′″	°′″			
箱崎遺跡 第56次	福岡県福岡市 東区箱崎1丁目 2505,2506,2939	40130 0665	33° 37′ 07″	130° 25′ 22″	20070201 ～ 20070427	424	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・主な遺物				特記事項
箱崎遺跡 第56次	集落	中世～近世	集落-中世～近世/溝8井戸21土坑17性格不明遺構2ピット多数-土師器+陶磁器+土師質土器+須恵質土器+瓦器+石製品				
要約	調査地は箱崎遺跡西側の砂丘緩斜面に位置し、砂丘面の標高は1.9～2.0mを測る。ほぼ水平だが、北側と西側にむかって緩やかに傾斜している。遺構は溝8、井戸21、土坑17、性格不明遺構2を検出した。井戸21基のうち3基は近現代の井戸である。ピットは東西南北に並ぶものと、現在の街区方向に並ぶものとの2種あることが確認された。溝は現在の街区方向に走っている。遺構の時期は12世紀後半～14世紀が中心である。中世を遡る遺構は検出されなかった。また19世紀後半の廃棄土坑から多量の陶磁器群が出土した。遺物は全体でパンケース44箱分出土した。						

箱 崎 3 7

一箱崎遺跡第56次調査報告一
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1047集

2009年(平成21年)3月31日

発行 **福岡市教育委員会**
福岡市中央区天神1-8-1
(092) 711-4667

印刷 **セントラル印刷株式会社**
福岡市中央区大宮1丁目5-13
(092) 522-3181